

根岸吉太郎が16年振りに発表した『ゆきてかへらぬ』は、寡作な映画作家である根岸が久々に見せた、男女の三角関係を描いた奥行きを感じ、しかも過不足なく描いた良質な作品であり、根岸という映画作家の存在感を改めて知らしめたものとなったと言えるでしょう。同時に田中陽造の練り上げられた脚本の力にも驚かされたものです。いつしか根岸吉太郎も75歳という年齢を迎え老成、枯淡の域を迎えるかと思いきや、決してそうはならず瑞々しささせ時折感じる映像に感じ入ることもありました。

根岸吉太郎は、「野田高梧の脚本における時間経過」などをテーマとする卒論を提出し、早稲田大学第一文学部を卒業し、「日活」から「につかつ」に替わり10年振りに新規採用を再開した「につかつ」に入社しています。（個人的なことですが、1979年の入社試験を筆者も受けた経験があり、当時助監督試験や脚本家を採用する映画会社は皆無に近い状況でした）藤田敏八、曾根中生、長谷部安春諸氏の助監督についた後、1978年に『オリオンの殺意より 情事の方程式』で監督デヴェウを果たし、ロマンポルノ作品を5.6本監督した後、ATG配給『遠雷』（1981）でブルーリボン賞監督賞と芸術選奨新人賞を獲得し頭角を表します。このとき31歳です。

さて、根岸吉太郎の『遠雷』を封切りから44年を経過した現在、改めて見ました。宇都宮あたりか北関東でトマト栽培を営む23歳の青年を主人公に、彼の結婚、幼馴染の既婚女性との出奔など彼の周りで起こる出来事そして都市化の進むかつての農業を生業をしていた地方の変身の様子といった周辺環境が克明に描かれていきます。ここに溢れ出てくる極めて日本的（日本流と言うべきか）リアリズムこそこの作品の核心であり、翻弄されながらも力強く生き抜く若者の姿が見事に描写されます。このリアリズムの源泉となったものは一体何なのかという疑問が浮かびます。

1980年代に入り、政治の時代、言い換えれば左翼思想の後退期を迎え、かつての学生運動の闘士たちは独自の道を歩みます。継続して地下活動を行う者もあれば、官庁・大企業への就職を果たしエリートコースを歩む者もあったのです。与党保守党は1955年体制を堅持しながら、今度は党内での権力闘争に明け暮れた時代でもありました。1960年に最も先鋭的な存在だった映画作家大島渚は、1980年代には『戦場のメリークリスマス』（1983）『マックス、モン・アムール』（1987）の二本の作品を制作に留まるとともに外国資本に依存しての作品でしたし、篠田正浩も三人の中では四本と最も多い作品を発表しますがかつての研ぎ澄まされた感覚は鈍麻しているように感じられますし、吉田喜重は『人間の約束』（1986）『嵐が丘』（1987）の二本の大作を発表するものの興行的な成功には結びつかず、かつての旺盛な制作環境からすれば比べようもない寂しさを感じざるを得ません。

こうした状況にあって特筆すべきは、ディレクターズ・カンパニーの設立です。かつて今村昌平の下で監督修行を行い『青春の殺人者』（1976）『太陽を盗んだ男』（1979）で日本映画界に新風を送った長谷川和彦（1946~）が中心になり、石井聰互（現石井岳龍 1957~）井筒和幸（1952~）池田敏晴（1950-2010）大森一樹（1952-2022）黒沢清（1955~）相米慎二（1948-2001）高橋伴明（1949~）そして根岸吉太郎によって設立された法人で、個性派集団としての期待が大きかったのは事実です。しかし、10年という時の流れの中で倒産を迎

え、徒花的存在であったという評価もある一方で、日本映画研究者の鷺谷花（1974~）は、「フリーの映画作家の時代としての1980年代を象徴する出来事の一つ。黒沢清の商業映画のデヴュウの機会を作り、相米慎二の代表作のいくつかを世に送り出し、同時代のアメリカホラー映画のローカライゼーションに積極的に取り組むことで90年代以降のJホラー登場のプラットフォームを準備するなど活動の意義は多岐に渡る」と評価しています。とは言え、中心人物であった長谷川和彦が一本の作品も撮らなかつたことこそが悔やまれますし、そのこと自体が日本映画界の方向性を誤らせることになったのではないかと疑問を抱くことでもあります。

『遠雷』は立松和平（1947~2010）の原作を『ゆきてかへらぬ』の田中陽造（1939~）の門下と言うか、師事した荒井晴彦（1947~）の脚本によるものです。田中陽造そして荒井晴彦へと流れる系譜の特徴の一つは、鋭い人間観察であり、人間の生と性の姿を大胆に描く、ある意味人間性の解放へとつながる強い意志を感じるものです。とめどなく流出するコントロール不能なりピードがあり、これこそが作品の源泉ではないかと考えるのです。ラスト近くで、主人公（永島敏行）と幼馴染（ジョニー大倉）との間での罪の告発のシーンは、長回しを含め10分以上に及びますが、ここはこの作品の白眉であり、人間の弱さを何の衒いもなく素直に表現した見応えのあるシーンです、彼らはある意味無邪気で、だからこそ性的欲求の高まりを隠そうともせず、また不倫の途を選んだものであり、所謂青春の過ちを犯して行くのですが、本作ではそれが青春の特権だとはできない作り込みができているとも言えます。

本作の脚本を担当した荒井晴彦に関しては、脚本執筆活動のみにとどまらず近年でも『火口のふたり』（2019）『花腐し』（2023）の監督も行い十分唸らせてくれました。『遠雷』は、につかつロマンポルノ出身監督とそれを支えた人脈（スタッフ陣）の強靭さを伝えた作品であり、特に安藤庄平のカメラ、そして井上堯之の音楽が一層の効果を高めています。